

# 双三郡遺族会

## 双三郡遺族会概況

昭和二十九年三月に、三次町、十日市町、酒河村、和田村、河内村、神杉村、田幸村、粟屋村の八ヶ町村が合併して、三次市となったので、現在の双三郡は三次市を中央に、北は君田村、布野村、作木村、東は三良坂町、吉舎町、西南に三和町と三区分されている。

昭和二十四年、県遺族連盟が創設された時、双三郡から、川地村会長、山田金男氏が出て県連盟の副会長に選任され、初代県会長藤田直義氏を助けている。高岡啓三郎十日市町会長が県の理事に、三次町の会長三原芳一氏が評議員に二十六年は県副会長にと、創始期の県遺族連盟の振興に寄与している。

双三郡は二十七年には三次町の会長木島次郎氏が郡の会長に選任され、郡の組織が確立している。

■当時の双三郡各町村の会長は次の通りである。

三次町	木島 次郎	三一〇柱	作木村	松岡 茂義	二六三柱
板木村	柳井伊太郎	一六三柱	八幡村	藤谷 真直	一〇四柱
川地村	西田 平一	二〇〇柱	吉舎町	金田 建一	二四六柱
十日市町	高岡啓三郎	三六九柱	三良坂町	山口 精一	二三六柱
酒河村	酒井雷太郎	一一五柱	和田村	錦織 考之	九八柱
河内村	沖森 盛平	八六柱	神杉村	中山 諸一	八七柱

## 三次市の独立

昭和二十九年三次市が独立したので、六月三次市、双三郡両遺族会の役員会が開催され、両会の会長副会長を選定。

三次市遺族更正連盟の会長 木島次郎氏（三次町）、副会長 高岡啓三郎氏（十日市町）、同岩井 瑟氏（神杉町）と、双三郡遺族更正連盟の会長 山口精一氏（三良坂町）、副会長に西田平一氏（川地村）同大野元義氏（布野村）が選出された。

この頃より講和条約も締結し国民等しく真我に帰り、平和民主の日本再建に、わけて遺族会として英霊の顕彰、護国神社の再建、招魂祭の復活等が、県本部に於いても議題とされて来た。本地区は県会議員議長小谷伝一氏の産地でもあり、原爆で焼失した、広島護国神社の復旧、再建に広島護国神社奉賛会が結成せられ県遺族会長をとの事もあったが、小谷伝一県会議長が会長に就任された。

小谷議長はこの際広島県は護国神社が広島と福山で二社あるを一社に統合する案を出され、備後地区の強い要望があり護国神社として存続する事になった。祭神も安芸、備後と区域を限定せず、遺族の交通便等の要望を容れ芸備沿線の比婆、庄原、三次、双三地区の英霊を広島護国神社に合祀される様になった。小谷議長の強力な英霊顕彰の政治政策と相まって、遺族会の活動も活発で、川地村出身の西田平一氏県副会長に推

君田村	梅木 定一	二〇六柱	田幸村	山中 徳三	一〇一柱
布野村	大野 元義	一七三柱	川西村	里瀬 正美	一四四柱
粟屋村	野村 久登	一四〇柱	双三郡 計	三、一三九柱	

され又護国神社総代役員としても活躍された。郡会長は常に県の理事会、支部長会に出席して、中央及県の努力目標を伝達、合議し各町村支部の自主性を重んじ、育成、振興に努めて来た。

## 三良坂町遺族会

古い時代から陰陽を結ぶ駅として栄えた当地は出雲大社分院もあり、敬神思想の深い処で、遺族会創設の先導者たる初代会長、山口精一氏は三良坂町長として多年力量を町行政に尽くされ、教育行政者としても県公立学校施設整備結成同盟会長として、町遺族会長より郡会長としてその功績は誠に大である。英霊顕彰に関しては大正時代に創設された、町護国社たる「桜神社」があり毎年四月十日は恒例の大祭、慰霊祭が行なわれている。年四回の神社清掃も、町民の関係者団体によって確実に実施されている。本町遺族会活動の特色は、年当初の役員会に於いて、中央県の指令を参酌して年度の努力目標を定めて町遺族会の活動の活性化に努めて来ている。

1 純潔崇高なる英霊の犠牲奉公の精神を承継しこれを永遠に伝え、平和と日本建設の基礎たるの意義を明らかにし相戒めて遺族たるの誇りを保ち、相扶けて同憂のよしみを厚くし、もって平和国家の実現に寄与することに努める。

○年の始め総会を執行して意識の統一を計る

○桜神社を中心として英霊顕彰の町民思想高揚に努める

○毎年四月十日の慰霊祭、年四回の清掃行事の励行

○終戦五十周年 記念行事の実施

役員

歴代会長 初代 山口 精一（昭二四〜昭四四）

二代 木村 菊一（昭四四〜昭五〇）

三代 渡辺 剛（昭五〇〜平四）

四代 阿部 由一（平四〜現在）

現役員

会 長 阿部 由一 副会長 堀 修吾  
婦人部長 新谷ヤス子

## 三和町遺族会

旧世羅郡上山村と同郡津名村敷名地区と双三郡板木村が合併して、三和村となる。上山村は名村長、寺野直一郎氏が明治、大正、昭和と三世に渡り、四十有五年の善政をなし、名峰天神嶽の山頂の夫婦岩に「忠孝」の文字を刻して示した如く、愛郷崇祖の「日本の心」を村是とし、村政の振興に努め、大正九年、山縣有明公の揮毫になる忠魂碑を建設、神社を統合、村民憩いの広場を造って、招魂祭を挙行、かつては草競馬などを行って招魂の行事を実施されて来た。現在自然公園に改修して先輩の遺志を継承して、桜咲く四月町主催の追悼式が盛大に行なわれている。

歴代会長

板木村会長 柳井伊太郎

上山村初代会長 平田静一 二代 森田 哲

三和町初代会長 林 最質 二代 森田 哲 三代 片岡案山子

現在の役員

会長 佐藤 孝明 副会長 河野 忠 同 岡光 義範  
婦人部長 吉高サトミ 青壮年部長 重信ツユコ

監事 柳井 一則、梶谷 幸夫 郡事務局局長兼務 高味 正純  
会費 受給者 三、〇〇〇円、一般会員 五〇〇円

定例行事

○各地区別追弔法要 忠魂碑二 慰霊碑一 遺族会主催

○遺族碑の清掃と供養 八月、十二月

○広島護国神社団体参拝 秋

○会員の研修旅行

○県郡遺族会主催の靖国団参に参加

○郡遺族会役員研修会参加

## 作木村遺族会

広島県の北端に位する布野村、君田村と並んで西南は江川に沿って北に伸びた細長い村で、常清滝は有名で面積の八二％は山林で冬は大沢高原スキー場、名産の梨や椎茸が、英霊のなつかしい思い出であった事と思う。英霊数二六三柱、恵まれた自然の古里に育ち、尽忠報国 日本男子の本懐を遂げられた郷土の勇士は慰霊碑に祀られている。

戦没者並びに原爆死没者と共に年々村の主催で追悼式を行っている。

広島護国神社大祭は隔年秋に参拝している。

初代会長 山本コヌイ

現在の役員

会長 佐伯 良三 副会長 加良谷俊祐 同 三上ヒサコ

婦人部長 坂上ヨシコ 青壮年部長 宮崎 有

監事 沖田 朝子、森崎イツエ

会費 受給会員 四、〇〇〇円、一般会員 一、〇〇〇円

## 吉舎町遺族会

吉舎という日彰館中学校を想起する。県北の文化の町として、明治大正期、本学舎が多くの人材を地方に送り出し振興発展に貢献している。特に軍人を志望して、尽忠報国することは日本人の大きな一つの理想であった。本学府より軍人を志願して名を成した方も多く、吉舎町内に祖霊社六社、頌徳社がある。いづれも氏神社の境内社として明治以来の、戦没者の英霊が祀られている。忠魂碑二碑も守られて、それぞれの地域で慰霊の行事が定例的に行なわれている。

町の慰霊行事は、主催を社会福祉協議会の名に於いて行い、現在では、追悼式として全町民で実施している。

英霊柱数 四二一柱、遺族数 三二七（内受給会員五八、会員二六九）

婦人部数 三〇 青壮年部数 一一

会費 受給会員 四〇〇〇円、一般会員 四〇〇円

現在役員

会長 青木 成三 副会長 梅木 明美 同 道々 啓壯

婦人部長 伊藤スミエ

青壮年部長 星埜 弘 監事 加藤 勝、森末 和人

創設以来の会長名

初代会長 大岡 宏 二代会長 金田 建一

三代会長 後藤豊三郎 四代会長 大田 庄一  
年間行事の概要

- 一、郡遺族連合会の会議に於ける中央及県の努力目標の伝達と実施
- 一、靖国神社団参 広島護国神社団体参拝の決行
- 一、慰霊碑各祖霊社の清掃、慰霊行事の定着
- 一、会員の親睦 見学研修旅行の実施

## 君田村遺族会

番神さんの神前に正座して、しきりに礼拝しているお婆さんに声をかけて話すと、お婆さん涙を拭きながら、私の一人息子が戦死して、今日は三十五年目の命日、嫁いで来て三年目待望の男の子が生れて、この番神さんに度々お参りして育てた長男、一男二女に恵まれて、幸せな人生もこの度の戦争で、名誉の戦死、誉の家と皆さんから賞讃されます。国の為に一命を捧げ護国の神として靖国の社に祭られる。日本男子として申し分ないことですが、生みの親としては悲嘆の涙はつきません…と、お国に役立つ子に育てて下さったお礼参りで心をなぐさめていますと、思い出話はつきない。この悲しみは遺族肉親の偽らざる真情である、君田村一村で一五柱の英霊、村内二基の忠魂碑を守って昭和二十七年梅木は一氏会長となって、村遺族会を創設し二代会長中野正氏、三代会長高下求氏と会の組織と活動の強化に努め、四代会長山脇喜義氏、五代会長高下勝三氏となり郡活動に協力よく活性化に努力されている。

現在の役員

会長 山口 誠 副会長 清水 章司

婦人部長 清水アサヨ

農山村寒冷地帯で遺族の高令化により遺族会主催の追悼法要は二年に一回とし毎年春秋の広島護国神社参拝、会員の研修の旅は郡の行事に参加、県及郡の研修、役員会の動向については伝達を密にする様心掛けています。

予算及会費

追悼法典については全額村社協が充当

護国神社参拝については経費の二分の一補助

会員の会費 受給会員 五、〇〇〇円、一般会員 一、〇〇〇円

## 布野村遺族会

布野村というと陰陽交通の国道五四号線、赤名峠を通過して出雲参りの県北の地、歌人中村憲吉の生誕地で「満月は暮る、空より須臾に出で、向いの山を照りて明るし」。知波夜比売神社の忠魂碑に一七三社の英霊が祀られている。遺族会を設置したのは、昭和二十七年で現在会員として活動している遺族数は一五〇戸で、村独自の立場で慰霊追悼の法典を三年に一度は村を代表して社会福祉協議会が行い二ヶ年は遺族会が主体となって慰霊祭を碑前で行っている。広島護国神社の大祭参拝は毎年の秋、神式、仏式と交代に参拝している。その他の諸行事については郡遺族会の年中行事に参加している。

歴代会長

初代会長 大野 元義（昭二七〜昭三二）

二代会長 有馬 四郎（昭三三〜昭四六）

三代会長 永末シゲミ (昭四七、昭四八)

四代会長 下田 九市 (昭四九、昭五一)

五代会長 弓掛ハツミ (昭五二、昭六三)

現在役員

会 長 石田 耕三 副会 長 横川 博美

婦人部長 才田フミエ 青壮年部長 丸田 亘

監 事 滝野口清之、河野 静子

会費 受給会員 四、〇〇〇円、会員 五〇〇円

青年部 一、〇〇〇円

## 式 辞 (双三郡三和町)

本日は戦争終結五十周年記念事業記念碑の除幕式を行うに当りまして公私共に大変お忙しいところ富野井県会議員様 神重町長様 竹川議会議長様をはじめ多くの御来賓の方々 又多くの地域の方々の御臨席を戴き 誠に除幕の式典を執行させて頂きました

誠にありがとうございます 衷心より厚く御礼を申し上げます

想いますに 五十年前までは兵役の義務は日本国民の大きな義務で何人もこれに異論を唱えることは許されませんでした 全ての男子は二十才になると徴兵検査を受け兵役に服することとされ 明治以来幾多の戦役に多くの若者が参加し 出発の朝ここ馬通峠の高台に立ち多くの村人の見送りを受け 村長さんは 一生懸命の御奉公と武運長久を御祈りしますと激励され若者は一死以て報国を誓って炎熱の南方 極寒の北辺で祖国と民族のため一身を犠牲にして戦い 又内地に残った老幼婦女子は言語に絶する苦難に耐え若者のいない国を護りつづけました。

然し遂に 昭和二十年八月十五日我国は無条件降伏で戦は終わりました。九死に一生を得た者は復員し戦後の再建に努め 一方苛烈な戦のなかで傷つき あるいは病に倒れながら ひたすら祖国の繁栄を信じ 家族の安否を心配しながら異国の戦場で散華され この馬通峠の土を再び踏むことの出来なかつた方々は実に一九一名の多くを数えなくてはなりません 無常の極みでございます。

生と死を別けた 訣別の跡に今立って往時を想起し体も震え心の高ぶりを感ずるものでございます。

今日我国はめざましい繁栄をとげてまいりました。然しこの繁栄の陰には多くの戦没者の尊い犠牲がその礎となっていることを片時も忘れてはなりません

今年には戦後五十周年の節目に当ります 人間と人間が殺し合う悲惨な

戦争は二度と繰り返してはなりません

又国の内外に多くの惨禍を残したことに想いを致し 戦没者並びに犠牲者に心から追悼の誠を捧げ永遠の平和を誓い祈らなければならぬと思ひます

このような意味あいから 記念碑建立の話が興り其の主旨を広く多くの方々に御伝え致しましたところ御賛同を戴き出費多端の折にも係わらず多額の浄財を御寄付戴き 立派な記念碑の建立ができました 誠にありがとうございます 厚く厚く御礼を申し上げます

建立に当りましては 三次市下志和地町片岡利隆様 詳博様には本事業に深い御理解を戴き敷地の御寄付を戴き 又工事の設計につきましては長尾造園様 今實石材店様には本事業の精神を御理解戴き最高の技術と良心に基き立派な石碑を完成して戴き大変ありがとうございます

後になりましたが 富野井先生には碑の題名「訣別の跡馬通峠」の筆を御執り戴き 山本隆司先生には碑誌の起草選定に大変な御心配を戴き各世話人の皆様には今春以来度々の会合等心からの御世話を戴き誠にありがとうございました 厚く御礼申し上げます

重ねて申し上げます 除幕に当りましては 戦争体験の全くない子供さんにも参加して戴き 今後五十年 百年 何百年と 永い年月をこの馬通峠を通る人々が この碑を仰ぎ見て 戦争を昔の物語として彼方に追いやることなく自分の手許にたぐり寄せて戴き昔の事実を想い浮べ 明日を考え 戦没者を追悼し 永遠の平和を誓って戴くことを期待し 且は御祈を致し 多くの人々の善意に感謝し 御礼を申し上げ式辞といたします

平成七年十一月二十五日

戦争終結五十周年記念事業 記念碑建立世話人会

会長 竹 河 壽

## 後 が き

双三郡遺族連合会会長 青 木 成 三

「がまんしましよ勝つまでは」の辛抱と「八紘一宇の精神」とが、あの大戦を支えてきたが、終戦からすでに五十年を経るに至った。世相は一転して、価値観も変ってきた。一番身に染みるものは国の楯として戦場に一身を捧げ「帰らぬ人」となった人の在ることである。まことに痛恨の極みである。

今日「人命尊重とか」「一人ひとりを大切に」とかを標ぼうして、人

権週間を設定し個人を大切にすることを展開されることは、新憲法を基底とした極めて当然のことと考えられる。このことにかんがみ、戦場に散華された方々の霊を慰めることは、これまた当然のことであり、現及び将来にわたって、永久に継承されるべき行為と思われる。

過去当郡においても、戦後各町村ごとに戦没者の慰霊祭を毎年執行され、現在もなおそれは継続されているが、中には社会福祉協議会の主体で実行されていることである。戦没者に対する慰霊の事業は町村主体で追悼してほしいし、そのことは町村民意識の継承にもつながると思う。当郡の遺族連合会発足当初の会長は、山口精一氏（三良坂町庄塚の方で三良坂町長）・木村菊一氏（三良坂町三良坂）・大田庄一氏（吉舎町安田）・続いて渡辺剛氏（三良坂町新開）が代々継承され、各町村毎に神式・仏式による慰霊の祭典が執行されていたことを思えば今更の如く感じられてならない。また、遺家族の福祉増進、会員意識の高揚や啓発、町村遺族会間の連係を保持するなど、これまで毎年継続されている町村遺族会の幹部研修、旅行を通して親睦をはかり、会の目的達成にまい進したいと考えている。

現在、いちばん問題とし課題となっていることは、年々正会員数の急激な減少をみていることである。このため、とかく活動に制限を受け沈滞がちになることである。いわゆる基金を創設し自主活動の基本を確立することは急務であり、このことは他市町村も同様であると思われる。

なお記述が後になったが、靖国神社や護国神社などへの参拝は、ことあるごとに参拝し、慰霊のまことを捧げるとともに、自己を顧みるよすがとなすべきであると考えられる。



町立護国神社 櫻神社の慰霊祭



双三郡三和町忠魂碑



# これまで歩んだ五十三年

双三郡吉舎町敷地

双三郡遺族会青年部長 星 埜 弘

私は、昭和十五年六月二十四日、星埜家の長男として、父倍、母ノブエとの間に生れた。当時日本は戦時下であり、世の男達は、次から次ぎへと戦場に狩り出されて行っていた。私の父も、ご多分に洩れず、私が生れて五十八日目、八月末に出征したそうである。まだ首の座っていない当時の私に記憶のあるはずはない、男の子の誕生を喜んでいたのと、父はそのまま帰ることなく、翌年昭和十六年十二月八日、大平洋戦争突入のその日、中国上海の病院にて死亡したのである。姉五才、私一才半の時である。私の家の奥の間に掛けてある写真の父しか、私は知らない、その写真で見るとかぎりでは、いかにも真面目そうで、やさしさ一杯の父のようである。従って私は父との思い出は全くないのです。

以来未亡人となった母、祖母、姉と私、四人の細々とした星埜家の生活が始まることとなったのです。祖母コシマは、なかなかしっかりしなおばあさんであり、長男である私を常に連れて歩いてくれ、可愛がり又厳しく育ててくれました。小さい頃子供同志で、けんかでもすれば、「帰っておばあさんに言いつけてやる」こんな言葉を吐く程、頼れるというか、父のいない私にとって強い味方となる、おばあさんであったと記憶している。子供で荷車を引いて山へ薪づくりに出かけ、大きな荷車が小さな子供にとって、思うように引っぱる事が出来ず困った事、又小牛を買って大きく育てる事もしていて、牛に運動をさせてやったり色々世話をしてやるのも小学生の私の役目でした。私が成長するまでの間地

域の方々には、ずいぶんお世話になって来た事に大変感謝しています。地域行事等で男役が当たれば、どなたかにかわってもらい、精神的にもささえていただき、多くの面で助けてもらったおかげで、今日の私があると思っています。又母子家庭であるが故に何くそと思う事もあったが「僕が大きくなったら……」という思い、それも今の私をつくってくれたと思っています。一昨年十二月、父の五十回忌の法要を営み、本当に月日の経つのは早いものだと思っただけです。あらためて自分の年令を思い、そして子供達の成長に目を細めたのでした。父との思い出を持たない私は、自分の子供達にはこんな事はさせたくない、こんな思いで子供達の小学生の頃毎年旅行に連れて行ってやったり、子供達と遊んでやる時間をつくってやった事等思い出されます。今は長女も二十四才勤め、長男は二十一才学生共に良い子で、成長してくれたと思っています。幸せのまっただ中に毎日を送らせてもらっているが、あの忌まわしい戦争は、半世紀過ぎた今も、決して終わっていない、決して忘れてはならない、今だに原爆で苦しんでいらっしやる方々、当時中国に残り日本に帰って来れなかった、中国に残留せざるを得なかった方々、祖国日本で余生をという強い思いの人達など決して戦争は終わっていない、私達はあの戦争を決して風化させる事なく常に平和を求めていかななくてはならないと思います。いつかはお世話になった方々へ、そして地域のみなさんへ、ご恩返しを、しなくてはとの思いは常々持っていましたし、今まさに私にとってその時が来たと思っています。この平成五年二月、幸い多くの方々のご支援をいただき、吉舎町議会議員となりました。平和を追い求めながら、明るい地域づくりに、又まちづくり、お互に痛みのわかる社会になるよう、懸命に取り組んで行きたいと、心に誓っています。

# 私の歩んだ道

君田村大字東入君

## 小野久子

顧りみると五十七年前聖戦と名付けられたあの支那事変昭和十二年七月の大召集に当時陸軍歩兵伍長であった主人は多くの郷土の在郷軍人と共に出征して行き八月上旬には極秘裡に大陸に渡りました。当時私の家では祖母、舅、姑と私、長男が三才私のお腹には三ヶ月の胎児が残されていました。翌十三年三月末次男を出産し、四月四日北支にて戦死との公報を産後十九日めに受取りました。その時はもう農繁期で水田に堆肥を負い込んでいましたが、どんなにして田から出たか家に帰ったか覚えていません。それ以後は戦争未亡人の誰もが体験なさった事ですが三人の年老いた人たちに助けられ乍ら二人の子供の成長のみを願ってそれこそ風邪をひく暇もない程働きました。十四年末からは日本発送電によるダム工事が始まり立退きを余儀なくされ働き手のない私宅で



は、日本発送電から村へ入る営業収益税の一角を立退犠牲者へ配分の金と扶助料とで何とか生計が営まれると思ひ湖畔に居住することになりました。ところが敗戦となつてからは暫くの間は扶助料は停止され、又日発から入る税の改革とかで村からの金もなく立退き当時の田畑の代金はその時代では代替えも充分出来る価格でしたが数年後から急激な貨幣価値の変動は外に収入のない私共には致命的でした。その内米の配給制度がはじまり、ダムの出来ない時は米も売っていたのに配給米を受け乍らの家族六人の食糧の確保等の苦労は筆舌に尽せぬものがありました。終戦となり、方々に復員されて御挨拶に来られると父親の面影を知らない次男が「アレお父さん」と尋ねます。亡くなったと云つても頑是ない幼な児にはわからず姑や祖母と共にどれだけ泣いたことでしょうか。今頃の様には福祉活動はなく子供達に勉強させてやれなかったことが今更乍ら残念です。

世の中が落ち着きを取りもどし、子供たちも成長し偉くなくとも人様に余り迷惑をかけないで過せる様になりました。祖母が三十二年に八十七才で四十年に舅が八十四才で姑は四十八年に九十一才で亡くなりましたが、今は定年も近付いた長男と五十才を過ぎた嫁と若い孫夫婦の五人が貧しい乍ら仲よく肩をよせ合つて楽しく生活しています。

今、半生紀の昔をふり返つてみますと、この家に嫁いで慣れない農作業にもやつと慣れたと思うと田畑は湖底に沈み、それ以後はあらゆる労働に従事しました。工事中には索道の搬器押し、川から砂やバラスを背負う土木工事等連日の重労働で今思うとよくも体が続いたと思います。工事が終り僅かに残った堰水区域外の農地を耕して収穫した十五俵の米、その時の嬉しさは今も忘れません。少しづつ心に余裕が出来てから

は今迄お世話になった社会に私に出来るご恩返しにと婦人会のお世話や、民生児童委員等及ばず乍ら務めさせてもらっていましたが、年令よりも早く腰が曲り歩行困難となり今は何の役にもたなくなりましたが近所の同年配の方々よい友達が多く、野菜作りの傍らいろいろの趣味に打ち込んだり今が私の一番幸せな時です。何時でも胸を張って主人の許に逝ける過去を誇りに日々是好日と自己満足の日々です。

ありがとうございます。

## 別れ告げた峠に碑（三和の板木地区）

戦時中、手旗を振って見送った

故郷去る兵士らしのび

日中戦争から太平洋戦争にかけて双三郡三和町板木地区から戦地に向かう兵士が振り返って故郷を最後に見た標高三〇〇メートルの馬通（まどおし）峠で、兵士や看護婦、青少年義勇軍として亡くなった百九十一人の名前を刻んだ石碑「訣（けつ）別の碑」の除幕式がこのほどあった。

### ■歴史の跡とどめるため

地区住民からの寄付金八百五十万円で五十四平方メートルの敷地に三基の碑を建立した。高さ二・一メートルの中央碑に「訣別の跡馬通峠」、右に名前、左に「戦没者と戦争犠牲者に追悼を捧げ、永遠の平和を誓う」と刻みこんだ。

建立世話人代表で元町議竹河寿さん（七四）らの話によると、峠は、戦地に向かう村の若者と村人が最後の別れをする場所だった。



双三郡三和町板木地区から戦地に向かう兵士が振り返って故郷を最後に見た（まどおし）峠に碑

隣町の境界となる峠に若者は立ち、村長らが「達者でやれ」「後のことは心配するな」と激励。万歳の声に送られ、若者たちは役場が仕立てた車で高田郡甲田町の国鉄駅へ向かった。

一九三九年（昭和四年）一月九日、三人で峠に立った元町教育委員の益田静磨さん（七七）は、車中で「生きて帰れ

るかろう」と話し合ったことを覚えている。

竹河さんらは「たんなる慰霊碑ではなく、歴史の跡をとどめるための碑。ほかにあまり例はないと思う」と話している。

碑の後ろの空き地に木を植え、周辺を公園化する計画をたて、元兵士たちの声を集めた冊子の発行を予定している。

戦後五十年を記念して、二度と悲しい出来事を繰り返さないため同町の年配有志でつくる戦争終結五十周年記念事業世話人会（竹河寿代表）が建立した。